しまね読進協 第44号

発行日 平成29年2月22日

発行所 島根県図書館協会読書推進運動協議会部会（松江市内中原町52番地 島根県立図書館内）

平成二十八年度 島根県図書館協会の主な事業

◎読書普及研修会

「人が集まる講座と思わず手にとるチラシの作り方」

講師　吉田　清彦氏（講座・イベントプランナー）

松江会場　一月十九日

浜田会場　一月二十日

◎公益社団法人・読書推進運動協議会より表彰

全国優良読書グループ

・西郷読書会（隠岐の島町）

◎島根県図書館協会より表彰

読書推進運動功労者

【団体】

・チェルシー（海士町）

・あのね（奥出雲町）

・おはなしの森（松江市）

・麗会（松江市）

・スウィートポテトの会（大田市）

【個人】

・井上　貴美子（邑南町）

◎読書体験記の募集

応募数　十五編

入賞　三編

◎「この本いいよ！～島根の高校生・高専生おすすめの一冊～」投稿の募集

応募団体　九学校

応募数　九十点

◎機関誌等の発行・配布

・「しまね読進協」第四十四号

美郷町立図書館の開館から現在までの読書推進の歩み

美郷町立図書館 みさと本の森

平成二十七年八月一日、美郷町における読書普及活動が実を結び、悲願であった町内初の図書館、「みさと本の森」が開館しました。

人が本と出会うための大きな窓口、地域の読書活動を支える拠点として、特に子どもたちへのサービスを充実させながら現在一年と半年近く運営しております。

平成二十八年七月には、利用者の皆様への感謝を込め、図書館の開館一周年記念と並行して「しまね子ども読書フェスティバルinみさと」を開催しました。

美郷町立図書館は、多機能コミュニティセンターみさと館と複合施設になっており、イベントホールや会議室を有しています。その利点を生かして、午前は一階イベントホールで絵本が原作の映画『おまえうまそうだな』を上映し、関連する絵本を展示しました。午後は「たんけん！みさと本の森」と題して図書館を探検してテーマに沿った本を書棚から見つけるイベントを行い、子どもたちは楽しみながら図書館の基本的な使い方を学びました。

また大人の方にも楽しんでいただけるよう、コーヒーやお茶を飲みながら本について語り合う「ブックカフェ」も行いました。この「ブックカフェ」は、ご好評頂いたのを機に隔月のイベントとして定期開催となり、本を愛する方たちの社交場となっています。

もちろん、こうしたイベントだけではなく、普段からの活動にも重点を置いています。

それまでボランティアで運営されていた図書室の閉鎖により、開館してからしばらくは読書環境の地域格差が課題となりました。現在はその解決策として、月に二度、図書館から遠い地域へ向かい、移動図書館を開催しています。利用して頂いた皆様からは新しい本が読めて嬉しいなどのご意見をいただき、続けて利用してくださる方も多くなっています。

同時に、子ども達の読書支援を目的として、保育園や放課後児童教室の団体にまとまった冊数の貸出を行っています。

図書館の開館から一年半が経った今、開館まで図書室を運営してこられた方々の想いを引き継ぎ、現状に満足せず、一歩一歩を積み重ねながら、これからも利用者の皆様に本に触れる楽しさをお伝えしていきます。

読書体験記 入賞作品

〈一般の部〉

『しあわせな王子』と「しあわせな私」

森脇　千　華（松江市）

我が家の二人の娘たちは、中学2年生と小学校5年生になりました。二人とも本が大好きで、暇さえあれば本を読んでいます。そうなったのは、他でもない私の「読み聞かせの習慣」の賜物だと自負しています。

私自身も幼いころから本を好んで読んでいました。特に縦横十五センチほどの、子ども向けのカラフルな絵本が大好きでした。可愛らしいお姫様が出てきたり、ハンサムな王子様が出てきたり。その鮮やかな絵を見るだけで、なんとなくワクワクドキドキしたものです。

ぜひ娘たちにもその感覚を味わわせてやりたいと思い、『しあわせな王子』を読み聞かせていた時のこと。3、4ページ読み進めたところで驚いたことに涙があふれてきて、もうすぐにでも目から雫が落ちてしまいそうになったのです。必死で涙と鼻水をこらえるのですが、字がぼやけてしまって読み進むことができなくなりました。幼い娘たちを前に、私は恥ずかしさのあまり、「ちょっとごめんねぇ。」と半分笑いながら本を床に伏せて台所に走り、キッチンペーパーで目頭を押さえ、「うそ、なんでこんなオハナシで泣けちゃうの？」と自問。部屋の真ん中で話の続きを今かと待っている二人を見て、「どうしようか、これ以上読んだら泣いていることがバレるかなぁ…。」と焦り……その後、どうしたかは覚えていないのですが、このできごと以来、読み聞かせる本を選ぶのに、少し慎重になったのだけは覚えています。

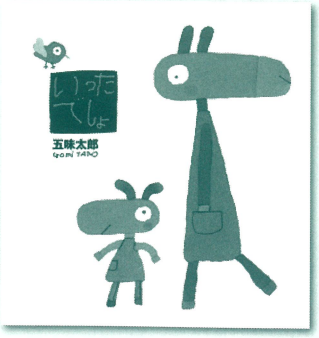
それは、今まで読んでいて平気だった本が、急に形を変えて読み手に語り掛けてくるのを初めて実感した時でした。でも、それは本が変わったのではなく、読み手（＝私）自身が変わったのでしょうね。親の愛に包まれながら生かされてきた側から、今度は子どもを産み育て、子どもを生かすために生きる側に回ったとき、今までとらえきれなかったその本の意図をとらえた瞬間だったんだと思います。

回数は減ったものの、私は未だに読み聞かせを続けています。それは晩ご飯の時間。味見をしながらお料理を作ったあと、娘たちと一緒に「いただきます」をすると、私一人だけはもうお腹が半分できあがっているので、「ごちそうさま」が早いのです。その早く終わった時に、小さな字をすらすらと読める娘たちにわざわざ本を読み聞かせています。娘たちはそれを一つも嫌がらず、むしろ喜んでくれています。話に集中してしまって、箸の進みは遅くなりますが、その時間はいつもよりゆっくりと流れ、急かされないマッタリとした時間。大きくなった娘と私の間に、言葉では言い表せない空気が流れます。私にとってそれは和みの時間です。

『しあわせな王子』。あと何年かしてもう一度読んだら、今度はどんな私（＝読み手）になるかな。試してみようと思います。

絵本のある暮らし

岩成和江（出雲市）



『いったでしょ』
五味太郎、偕成社

雲ひとつない青空の日、私は自転車で買い物から帰る途中、長い飛行機雲を見つけた。そのずっと先は、孫の朋希（ともき）が住んでいる中国だ。もう二年も会っていないが、今どうしているだろう。ふと幼い頃の、孫の顔が浮かんできた。

昔、私は自転車の後ろに孫を乗せ、よく図書館へ行った。孫は、絵本の中でも、五味太郎さんの『いったでしょ』がお気に入りで、「読んで、読んで。」とせがまれた。読んであげられない時は、自分で絵本を開いて、絵を見て笑っていた。五味太郎さんの絵本は、絵がかわいく、分かりやすく、文がおもしろい。何回読んでも飽きない。シリーズは、ほとんど読んだ。図書館の帰り、水車のある公園に寄り、借りた本を読んだ事もあった。今でも私は、休日にはその公園の水車を見ながら、一人、図書館に行っている。

孫は現在、中国重慶人民小学校の六年生だ。母親は中国人で、松江に仕事に来ていた。孫は生後四ヶ月から五才くらいまで、出雲のおばあさんの私とおじいさんで預かって育てていた。訳あって、母親と孫は私達と別れ、今は、中国のおばあさんと暮らしている。遠くで会えなかったが、二年前突然、母親が、朋希の父親と私達のために、朋希を連れて中国から来てくれた。

再会で、本当に懐かしく感動した。孫の言葉は、もちろん中国語である。うまく話せなかったものの、なんとなく母親の通訳で思いは伝わり、楽しい時間が経った。母親が、「おばあさん、朋希勉強好き、よく出来る。テスト九五点以上ばっかり、一学期『優』ばっかりだった。テスト良い点の時、ステーキを食べる約束していたからお金大変だった。」とうれしそうに話した。「朋希、大きくなったら、日本の大学に入れたい。私がんばって働く。朋希よく言う。日本のおばあさん、僕小さい時、膝の上で本をよく読んでくれた、と。おばあさん、ありがとう。朋希、今でも本が好きです。」と言った。私は再び感動した。朋希が元気で学校へ行っている、そして、勉強が好きだ。孫の成長を楽しみに、私も辛い時、絵本を笑顔で見ていた孫を思い出し、がんばってまだまだ働こう。朋希には、どうか親孝行で、人のため、世のためになる立派な人になって欲しい。そして私がもっともっと年をとったら、今度は朋希に絵本を読んで欲しい。

孫に読んであげた本を、今、老人ホームにいる私の母親に読んであげている。母は重度の認知症で、どこまで理解出来ているかわからないが、五味さんの絵本をじっと見て、「わあ」「い」「お」とか声を出す。うれしくなる。私と絵本が来るのを待ってくれている。先日は近所の子供が遊びに来た。その時、絵本を見せてあげた。子供達の絵本を見る目は輝いている。そして、お話をしてくれる。これからは、読み聞かせだけでなく、本を大切にする心も教えてあげようと思っている。

〈児童・生徒の部〉

私にできること

藤原夏絵（横田高校）

『たったひとつのたからもの
息子・秋雪との六年』
加藤浩美、文藝春秋

私のいとこはダウン症だ。私は、ダウン症という言葉をいとこを通して知った時からずっと、「かわいそう」と思いながら見てきた。この本を読んで、それは人を傷つける言葉だとやっと気付かされた。もし私が「かわいそう」と口に出して言ってしまったなら、いとこの両親も私の両親も怒り、悲しんだだろう。

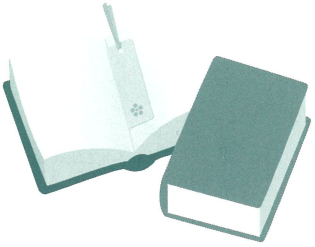
この本を読んで、ダウン症について何も理解できていなかったと思うことの連続だったが、一つだけ、その気持ちは分かると思えることがあった。それは、秋雪くんが余命幾ばくしかなくても、彼の両親は言葉を学ばせたり歩く練習をさせたりしていたことだ。私が親の立場でも、同じように大切に育てたいと思うだろう。それは、いとことその両親を間近に見てきたからそう思うのかもしれない。

「人の幸せは命の長さではない。」と言う秋雪くんの母親の言葉は、とても深いものに感じた。これはもちろん、秋雪くんの六年二ヶ月の一生を指した言葉だが、誰に対しても言えることだ。

私にとって幸せな人生とは、どんなものだろうか。辛かったり悲しかったりすることがなければ、幸せな人生だろうか。それは本当の幸せではない気がする。たとえ辛いことがあったとしても、それを乗り越えることが大切だと思う。その時の充実感は、辛かった分だけ大きいのだから……。人生は長さではなく、その質なのだ。幸せは時間をどう使うかで決まるのではないだろうか。時間を有意義に使いたい。そのためにはどうしたら良いだろうか。人が一生の中で一番多く関わるのはやはり人だ。将来働く場所での人との関わり方、友人や家族との過ごし方が大切だと思う。

私のいとこは、傍目には他の子とそう変わらず、ゲームが好きな中学生だ。いつも優しい笑顔で話してくれるが、私には何を話しているのかさっぱり分からない。心苦しくて窓の外に目をそらし、笑ってごまかしてばかり。私は正直、いとこにどう接していいのか、分からなくなっていた。近頃ではそういう場面に遭遇するのが嫌で、いとこを避けてしまうようになっていた。しかし、この本を読んで、いとこと過ごす時間やいとことの過ごし方も大切なのだと気付かされた。私もいとこと人間関係を築きたいと思った。

いとこの言葉を何の苦労もなくさらりと聞き分け、会話までしているいとこの家族。いとこの家族にいとこが何を話していたのか聞いてみると、その内容はいとこの話した時間より明らかに長く、いとこの言葉だけでなくいとこの小さな行動全体を見て理解しているのだと気付いた。何の気負いもなく、ダウン症の子どもを育てているいとこの家族には、私が想像できない辛いことや悲しいことがあると思う。でも、いとこと話す家族は、いとこと同じ素敵な笑顔だ。不幸せだなんてとても思えない。よし、まずは同じ空間を共有することから始めてみよう。そして、いとこに体を向け、顔を見て笑顔で話を聞いてみよう。



平成二十八年度 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「西郷読書会」が全国優良読書グループとして表彰されました。

◆西郷読書会（隠岐の島町）

代表者　岡田　光江

昭和五十六年に公民館活動のひとつとして発足し、活動の場を出雲大社西郷分院に移しながら、三十五年にわたり読書会を行っています。会員数は、現在十二名。会員が子育て中の時は、読書会と一緒に読み聞かせやBBQなどを企画し、子育てを終えた今は、年二回程度の会食を交えながら楽しく続けています。

継続のコツは、無理をしないこと。代表者が本を会員宅に届け、読書会に参加できなかった人はメールや葉書で感想を伝えています。気心の知れた仲間と読書を通して語りあい、時に年長者の経験談を交えながら一緒に考える読書会であるからこそ永く続いています。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年は五団体と個人一名を表彰しました。

【団体】

◆チェルシー（海士町）

代表者　竹村　智子

読み聞かせ活動がなかった海士町で平成十五年一月に結成された読み聞かせボランティアグループで、結成以来活動を続けています。

毎週木曜日の朝の十五分間、福井小学校で読み聞かせを行い、学校の年間行事でも、教職員と一体となって芝居や手品等も交えて読み聞かせ活動を行っています。また、ボランティア読書グループのリーダー役としても活動の場を広げ、町内の小学校や保育所等での読書活動の普及に大きな役割を果たしています。

◆あのね（奥出雲町）

代表者　若槻　えり

この地域での読み語り活動をしたいという申し出があり、この思いに賛同した人たちが集まって平成十五年に結成されました。現在の会員は十六名で、三十代から八十代までの幅広い年代の会員がいます。主な活動は、小学校・幼稚園に週一回の読み語り、老人ホームでは読み語りとパネルシアターの実演を月一回行っています。

会では、強制をしない、無理をしない、できる範囲で行う、ということを大切にしているため、会員の退会が少なく、このことが継続的な活動に結びついています。

◆おはなしの森（松江市）

代表者　中倉　広子

平成十四年から現在に至るまで、市内の幼稚園、小学校に出向き、お話（ストーリーテリング）を聞く機会を提供しています。会員数は現在6名です。

子どもたちの想像力を養い、やわらかな心や考える力を育み、情操豊かな子どもたちを育成する事業に携わってきた団体です。

◆麗会（松江市）

代表者　山本　良江

婦人への読書啓発の一環で昭和五十八年に発足。現在の会員数は五名、宍道88健康館で毎月一回読書会を行っています。これまでに読んだ本は三八五冊にもなり、読んだ本は各自ノートに記録をとっています。結成十二年目には、自分達で一編ずつ綴った記念文集を作成。また、講師を招いた読書会や他グループとの合同読書会を開いてきました。各々で役割を分担し、読書から広がる話題を楽しみながら三十三年継続しています。

◆スウィートポテトの会（大田市）

代表者　西村　巴

本会は、しまね子どもの読書等推進の会大田支部の発足に合わせて行われたストーリーテリングの講習会をきっかけに発足し、現在まで活動が継続しています。

主な活動としては、大田市中央図書館で毎月第三土曜日にストーリーテリング（三十分程度）を開催しています。また、十二月には「冬のおはなし会」と称して、メンバー全員によるスペシャルイベントのストーリーテリングを開催しています。ストーリーテリングの魅力や素晴らしさを伝える活動に情熱を傾けています。

【個人】

◆井上　貴美子（邑南町）

邑南町羽須美地区で子ども読書活動を推進しており、阿須那小学校と読書ボランティアとの連絡、調整を行っています。自主的に阿須那小学校の図書館を分類ごとに配架、資料を整備し、図書館司書が配置された後は相談相手となり、毎月のおすすめ絵本の展示にも関わっています。

また、羽須美分館の資料をデータ化するにあたって、ボランティアで入力作業をし、図書館の整備にも関わりました。平成二十一年からは、邑南町子ども読書推進委員として子ども読書活動に貢献しています。

編集後記

図書館は得てしてPRが苦手です。座して待つ、というところがあります。しかし今の時代、そんなことでは生き残れません。今年の読書普及研修会で、講座の企画やチラシづくりのコツやワザを学びました。印象に残ったのは「言葉力」。人の心に届く生きた言葉を使って伝えることです。読書離れが言われる今、本紙含め、読書普及にも役立てていきたいと思います。

（編集員一同）